

姉は宮城野
妹は信夫
碁太平記白石噺 一二

新吉原の段

〔解題〕 安永九年正月二日から江戸薩摩外記座上場。

有名な宮城野信夫の敵討を慶安太平記の世界に作り込んで、二女が宇治常悅(由井正雪)の後援の下に目出度く親の敵志賀臺七を討つを骨子とした作。

二女の敵討の實説としての所傳をかい摘んでいへばかうである。享保二年の事である、奥州白石足立村の百姓四郎左衛門が過つて領主片倉小十郎の劍道の師田邊志摩の供廻りを破つた爲に手討にされた。残された姉娘すみは十一歳妹娘たかは八歳であつたが、復讐の決心を堅め、仙臺なる劍術の師範瀧本傳八郎方に下女奉公をして傍ら劍術の修業を勵み、遂に享保八年四月公儀の許を得て仙臺城下白鳥明神社頭に於て素懷をとげたといふ。由井正雪の一件を仕組んだ戯曲としては、寶曆九年九月十六日から竹本座で興行された「太平記菊水巻」があるが、本曲は大體の結構趣向に於て、この作に負ふ處が尠くない。

作者としては正本の卷末に次のやうに詳しく掲げてある。

第一 一堂上地下の主従は繩目に引かるゝ大内の鶏合

第二 仇と誠の朋友は義心に別るゝ一國の首塚

紀上太郎
容楊黛

第三 お主と家來の妹と背は相圖に隠るゝ名鏡の奇特

第四 孝と實義の伯父姪は愁に亂るゝ血筋の植付

第五 婆娑と冥途の智男は餘所に見らるゝ一樹の宿實

第六 江戸と田舎の姉妹は我身に賣らるゝ軍用の品玉

第七 通と野暮との客と客は意見しらるゝ曾我物語

第八 白と黒との敵味方は位牌に紛るゝ幻術の仇討

第九 道行いはぬいろぎぬ

第十 色と情の娘と下女は智略にもつるゝ井出の山吹

第十一 仁と禮との南北朝は武威に顯るゝ和睦の勝鬨

この中で焉鳥旭は鳥亭焉馬の替名、三津環は紀上太郎の替名である。

本曲ではこゝに収めた第七段の新吉原の段が名高いが、これは歌舞伎年代記の著者としても知られて居る焉馬の作で、吉原の真中で田舎娘に思切つて奥州訛を使はせながら、同胞の眞情を發露させた點が勝れて居る。

題名は第八の「白と黒云々」の條で、常悅が基にかこつけて鞠が瀬秋夜（丸橋忠彌）が姉妹の敵討を急がせようとするのを抑へる場から出て「後太平記」にかけて慶安太平記を利かせたものと思はれる。

新吉原の段の現行の語り本は原作の丸本とは語句が相違して居る箇所も少くない。今は語本に従つて置いた。

場入相の。鐘さへ早く。暮れ果てゝ麻紗なりけるヲシ有様なり。此の君の度の曾我物語の次ぢやというて。置いの。内は萬燈會。歌舞の菩薩の色揃へ。フシカリ一字なりとも次の間から。宮て去んだぞえ。イヤ申し宮柴様。今日わけて全盛宮坂野が。部屋は上品奥二里宮柴うち連れて。詞太夫様御機嫌は。お客は仲の町の蔦屋から。締めから階。箆笥長持鏡臺の。埃取まで綾錦袂え。ホンニさつきに貸本屋が参じて。先んだ二人一座。宮城野様はもとより。

焉鳥旭

紀上太郎

紀上太郎

鳥亭焉馬

鳥亭焉馬

三津環

紀上太郎

紀上太郎

紀上太郎

お前も早う身仕舞して。オ、急しな。
 今身仕舞をするわいな。しかし差合ひな顔はないかえ。イ、エどれもく侍衆。一人のお方は器量よし。今一人は髭むちや。目の大きい。熊か人かといふ様な。どちらへ札が落ちうやら。マ厭な事ではないかいなど。地いづくの浦も客噂。誂るも里のフシ習はしかや。詞ア、コレ。そんな事いうて。遺手衆が叱ろぞえ。オ、叱つたてゝあた可笑しい。イヤ可笑しいついでに。昨日旦那さんが茂草で。抱へて戻らしやんした奉公人。おかしい物言ひではないかいな。サイナア遠い國から姉を尋ねて登つたとの話。宮城野様の慰みに。連れて来てお目にかけよ。お前もお出で地と連立つて。フシカ、リ行く後影見送りて。詞テモ扱も。わさくひとり物言うて。マアよい氣ではある程にの。

コレくしげり。そなはそこら片附けやと。地言付ける間もあるやなし。新造二人が伴ひに。厭がるものを無理無ある来とらへと。二階さあぶち上げて。體。突出されたる田舎の娘。傍りきよろ。コリヤまあ何たる所だ。どこもかも光くつひに見ぬ。錦の小より三つ蒲團り申して。お洒落の柳さあ見る様に。



塗りこべえた簞笥さア。其の上夜の物も金切れたモじやア。蒲團も蘇枋染の色^{いろ}のよさ。ホ、われらアねまつたら。踵^{かかと}の戦^{たたか}さア引つかゝつて。うつ切りべいちゃ。おやつかな魂消^{たまげ}申す。地たまげ申すと、フ言ひければ。地打倒ける程可笑しき隠し。詞コレそこなお子。お前の故郷國所^{こきやうこく}。爰へどうしてお出でた譯。話して聞かさんしよば。地お力ともならうにと。驚ると知らずしく泣き。詞オ、やさしな詞お言やり申す。私^{わし}ら國さア奥州^{おくしゅう}。父や母に様子あつて別れ申して。お江戸さアはあらく盛る所だアと聞き。其の上姉さア。

この吉原で名高い女郎さアに成つて居さるとの話。女子童子の身として。敵ない思ひをして。尋ねて来るも海山。物語りのある事。地聞いて憐れを添へてたべ。詞オ、モ何を言ふぢややら。すが。連れて往て逢はしてやらうと。駕ぬぢやア。ホ、オ、聞けば聞く程



をかしい話。そして今の赤はらとは。

あられもない^地と若い同志^しもくづる

る。フツ高笑ひ。^地知る人ぞ知る宮城野

が。押しなだめて申しお二人。浪花の

蘆も伊勢の濱^{いせ}。所々で變る物言ひ。

其の様に笑はぬもの。^詞今あの子の言

うてぢやあつた。だゝアやがアまとい

ふはな。爰でいふ父^{とと}様かゝ様。又赤はら

というてぢやは。噓^{うそ}はつかぬといふ事

ぢやわいな。扱^{さく}ても我折^{がた}マよう御存

じ。オ、知つたも無理か憂^{うれ}きふしは

夜毎^{よごと}毎に變る枕。^長地力、リ心盡^{こころ}しの

果ては愚か。奥のとうくのお客にも馴

れ親しんだ身の一徳。^詞オ、其のお客

で思ひ出した奥のお客が喧^{やか}しかろ。わ

たしも追付けそこへ行く。先へお出で

てよい様に。コレ／＼しげり仲の町の

井筒屋へ往ての。昨日の返事聞いてお

ぢや。早う。^地／＼といふ下から。遺手

の政が例のしやぎり。^詞サア／＼／

る。それを證據に名乗り合ひ。委細心

底打ち明けろと言ひめした。それがあ

るなら早くつん出し。見せてくんされ

姉^{あね}サアと。^地なつかしなながら油斷なき。

はす。寢そべる度に。ア、何やら。オ

オそれ／＼。^地赤はらたれて氣に入つ

て。日がら頼もと口々に言うて。フシ

座敷へ行くふりを。^地見やる宮城野お

のぶが傍^{そば}。もしやそれぞと摺寄つて。

詞さつきにからの話を聞けば。姉を尋

ぬる人さうな。^地奥州はどこらの生れ。

何といふ所ぢやえ。^詞アイサア。奥州

は白坂近在。逆井村といふ所。フウ其

の逆井村といふ所に。與茂作といふお

人があらうがの。アイサ。其の與茂作

オ、／＼。コレイノコレ。よう

といふのはめらしが父^{ちち}ア。ヤアそんな

顔見せてたもいなう。オ、姉^{あね}サアでこ

わらしが妹。^地と縋り寄るを突きのけ

さるかいのう。^地逢ひたかつたと諸共

て。^詞イ、ヤサ／＼。母^{はは}の常に言

に。嬉しなつかしさがり寄り。フシ

はしやるには。姉^{あね}サアの方にも印^{しるし}があ

外に詞も泣くばかり。^地斯くぞといさ

る。それを證據に名乗り合ひ。委細心

底打ち明けろと言ひめした。それがあ

るなら早くつん出し。見せてくんされ

姉^{あね}サアと。^地なつかしなながら油斷なき。

はす。寢そべる度に。ア、何やら。オ

オそれ／＼。^地赤はらたれて氣に入つ

て。日がら頼もと口々に言うて。フシ

座敷へ行くふりを。^地見やる宮城野お

のぶが傍^{そば}。もしやそれぞと摺寄つて。

詞さつきにからの話を聞けば。姉を尋

ぬる人さうな。^地奥州はどこらの生れ。

何といふ所ぢやえ。^詞アイサア。奥州

は白坂近在。逆井村といふ所。フウ其

の逆井村といふ所に。與茂作といふお

人があらうがの。アイサ。其の與茂作

オ、／＼。コレイノコレ。よう

といふのはめらしが父^{ちち}ア。ヤアそんな

顔見せてたもいなう。オ、姉^{あね}サアでこ

わらしが妹。^地と縋り寄るを突きのけ

さるかいのう。^地逢ひたかつたと諸共

て。^詞イ、ヤサ／＼。母^{はは}の常に言

に。嬉しなつかしさがり寄り。フシ

はしやるには。姉^{あね}サアの方にも印^{しるし}があ

や宮城野が座敷へ出ぬを不思議さに。
來かゝる亭主宗六が。様子ありげな部屋のていの。フシ忍んで事を立聞くと。

地知らず姉妹ひそく話。調オ、妹。

よう尋ねて來たもつたの。年端しほも行

かぬ其方。父様なりと母様なりとい。いづ

れぞ付いてお出でであらう。ガもし道

中ではぐれてかと。地問はれてわつと

聲を上げ。調ア、コレくくかう廻や

り合ふからは。悲しい事も何にもない。

泣いては濟まぬ。サアどうぞと。地尋

ねる姉のフシ心もそじろ。調エ、遠國

隔へだつた姉さア。それで何にも聞かない

な。父アは五月田植の時分。代官志賀

臺七といふ惡侍に。ヤアくくく何

といやる。サアぶつ斬られてお死にや

り申した。ヤア。と地悔ぐり差込む癪。

調とつとモウ悪い時。さうしてどうち

や其の跡は。サア俺おれだけでもすんでの事

殺さるゝ所。庄屋の伯父さアが駈かつて

來て。力きんで見ても肝腎の。證據なけ

れば父は犬死。雉子けしと鷹なりや敵討の

勝負もならず。すこらく。そんだの

許嫁よめの御亭にも對面はしたれども。是

も此の江戸さアへ歸り申す。跡は俺おれだ

アけと母とばかり。便りない身に下地

の大病。ヤアくくお煩わづらひでもあ

つたかいの。シテ御本復ごほんふくなさつたか。

サアどうぞや。イエ。六月十

六日に。悲しや終にお死にやり申した。

ヤアくくすりや御養生も叶はなんだ

か。ハア。エ、コレ話はなしさア聞いてさへ

それがいに敷かつしやるもの。直ちに見

とらへた俺おれだアけが心。エ、コレ泣か

つしやるは道理だけれど。便りに思ふ

姉さア又病氣おこしては猶か濟まない

くわいの。イヤく。イヤく。中々

煩わづらふ様な事ぢやない。さうしてどう

ぢやく。サア。なしよにもかしよにも

俺おれだけ一人。庄屋の伯父様おやさまが引取つて。

奉公しろと言ひめすけど。地何の奉公

どころかい。口惜しいと。悔くしいで。跡

先思はず。檀那寺だんなでうへ駈かつて。調坂東

あをつつ走つたも。そんだに尋ね逢う

たら。姉妹あねいもうと一致にし申して。父の敵

が討うちたいばかり。地道中だいちゆうすがらの

艱難きんなんも。そんだに逢あうが楽しみに。調

がいに。苦勞くるわうとは思はなんだ。しか

し逢うたらかつぱりと。しよつ骨が抜

けた様なく。コレそれがいに敷かつ

しやる手間で。妹はるく尋ねてよう

來てくれた。めこがめらしと言うてく

んさい姉さアと。地あやも泣入る稚氣こころ

に。長の旅路の憂き苦勞。思ひやるせ

も宮城野に。つゞくはすゑの。松山を。

フシ袖に。波越す涙なり。地歎なげきのうち

も姉は猶。妹が脊を撫下し。詞オ、其いが。悲しい話聞く姉が心も推してたれやれ。敵討たいで置かうか。オ、よの様に思やるも尤も。しかしそなたはもいのと。手を取交す姉妹が涙。涙を。う言やつた出かしやつた。幸ひ奥父母に。長う添やつた身の果報。コレ此の姉を見やいなう。年貢に迫つて父様は水牢。その苦を助けうばつかりに。コレ此の廓へ身を賣つたを。思ひ返せば十二の年。そなたは五つ子顔さへ見知らず。父様の御最期や。母様の死目にも逢はぬといふ。悲しい不孝な。いのか。ア、コレ肝腎のことを忘れて居最前からアイヤ。たつた今爰へ来た。はかない事があるかいの。斯うした事た。此の姉が許嫁の夫。此の江戸に居やガわが身たちは敵。サア。堅い約束とは露知らず。この妹は健な知らぬ。しやんとの話。其のお方の名所。定め男がある故。こゝを駈落ち。コレ悪い父様母様。お頃ひでもあらうなら。よて覚えて居やらうなう。ソリヤ忙しさを。そしてマアその田舎娘を知らず。便りのないぬといふ事があるものかいの。さう言い。昨日淺草で抱へて戻つたわいを杖柱。首尾よう年を勤めたら。國へいふ事なら敵の顔も。それ知らないでやなう。旦那様。私らが今の話。サア聞歸つてお二人に。樂させまして。どういものか。目眼のでつかな。鼻の平たいいたでもなし。又聞かぬでも。それ聞と許嫁の。殿御の事も。そなたの事も。男振。ア、コレもうよい。壁に耳。かれたら赦さぬと。突出す懐劍さす戀しなつかし思ふのを。カン樂しみ暮御浪人こそなされたれ。由緒正しい武がの姉妹鏡臺の。鏡おつ取り丁々ばした甲斐もなう。名乗り逢うたは嬉し士の娘。オ、めらし姉妹ぢやて。己つしり。詞ヤ何と違うたものか。違は

きやつえらい放^{はな}錢^{せん}ぢやわいの。コレ頼^{たの}ひ。ノ。コレ。く。此の道をも稽古^{けいこ}なが。おれが日鏡^{ひがね}も凡そ違はぬ。禮いもしさうなお客ぢや程に。隨分大事に^{たんと}して。鍛鍊^{たんれん}を熟した上では。ぐつとく。かけや。と智慧^{ちゐ}を付ける。マこんな得手勝手な商賈^{しょうが}はないわいの。けれど。コリヤコレ浮世の身過ぎ世過ぎ。さういふ程に。大事の勤め。駈落^{かちおち}せうとは無分^{むぶん}身分な此のおれでも。慈悲と情といふ別^{べつ}。お客大事に勤めてたも。ノ。ノ。事は。不斷心^{ふだんしん}に忘れはせぬ。まちよつというて見ようなら。此の宗六は最前^{さいぜん}言^いうた。鬼王^{おにおう}庄司^{しやうじ}左衛門^{さゑもん}ぢやと思や。外^{ほか}に烏帽子^{えぼし}親^{おや}の。北條^{きたじょう}殿^{どの}といふ様な。後^{あと}楯^{たて}でも出来てから。さつきの様に。思^{おも}ひ込んで突つかゝつた懷劍^{くわいけん}。おれにさへつい叩き落される様な事では。まさか敵に出逢うた時。ヤモすつぽんの間に合はぬ程に。おれがいふ詞に従^{したが}奉公人^{ほうこうにん}。を見立てて抱へたと言^いや仰山^{やうさん}。

なが。おれが日鏡^{ひがね}も凡そ違はぬ。禮いふ事も何にも及ばぬ。ノコレ。人の日鏡^{ひがね}に悟られぬ様。隨分とも化粧^{けいざう}けしやうも美しうして。奥の座敷へ。ソレ遣^や玉^{たま}の政は居ぬか。湯を持つて来てやれい。やい。エ、マしげりは居ぬかと地呼^{ぢこ}出して。言付けるのも賣物^{うりもの}に。花も實もある亡^{くわ}ハの宗六^{そうろく}生^{せい}梓^{そう}の。フシカリ淀^{ふしかり}まね座敷は大騒ぎ。牽頭^{けんとう}末社^{まつしや}が弾^{はじ}く三味^{さんまい}情^{じやう}に宮城野^{みやぎの}が。妹を部屋におく座敷引^{ざしきひき}別れてぞ。三入^{さんにゅう}入りにける